

令和元年6月21日現在

機関番号：34315

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12814

研究課題名(和文) 平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築

研究課題名(英文) Constructing an exhibition model for communicating war experience in peace museums

研究代表者

大村 順子(兼清順子)(KANEKIYO, Junko)

立命館大学・国際平和ミュージアムオフィス・職員

研究者番号：90773987

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：戦後70年以上が経ち、平和博物館はこれまでのように戦争体験者の存在に頼ることが難しくなっている。本研究は、この課題に向き合うための新たな展示のあり方を提起することを目的としている。そのために、これまでの平和博物館の展示の課題と戦争体験のない世代による継承の実践について検討し、これをもとに従来の時系列的な展示とは異なる新たな展示手法を用い、来館者の戦争体験に対する主体的な思考を促すことを重視する展示を企画し制作し、来館者調査や展示評を行った。来館者を受け手から伝え手に転じ、戦争体験に対する主体的な思考を促す契機を提供する展示の有効性を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの平和博物館展示は戦争体験を伝えることに主眼を置いていた。本研究では、継承は伝え手と受け手のコミュニケーションの中で成立することを重視し、戦争体験から何を汲み取るのか、受け手が主体的に考えることこそ戦争体験継承展示の要であることを提起し、戦争体験展示における着眼点を転換した。

これをもとに実際に展示を制作することで、歴史や継承そのものの意味を来館者に問うアプローチや時系列を遡る歴史展示など、戦争体験継承展示における新たな展示方法を提示できた。展示評と来館者調査でその意義が確認された。また、解釈を来館者にゆだねながらも考察を深めてもらうアプローチを続けることの困難と重要性も指摘された。

研究成果の概要(英文)：70 years after the end of the World War 2, peace museums can no longer depend on survivors to assist interpretation of historical experience on the exhibition floor. This research aims to present new type of exhibition to communicate war experience in such era. First, we examined issues within conventional peace museum exhibition and developing practices of second generation and third generation. Then based on the findings, we developed exhibition with unconventional composition, emphasizing on the importance of audiences' critical thinking toward historical experience, and conducted audience research and exhibition review. This exhibition presented the affectivity of inducing audiences' critical thinking toward war experience through flipping them into addresser.

研究分野：博物館学

キーワード：博物館展示学 平和博物館

1. 研究開始当初の背景

(1) 1960年代に戦争体験継承の重要性が広く唱えられるようになり、1970年代から80年代にかけて修学旅行などで展示を見学して体験を聞く実践が展開され、平和博物館は戦争体験継承の場とされている。全国に平和博物館数が増加した1990年代以降、若い世代に展示を見学させて体験者の話を聞かせることで、戦争体験を継承させるとする認識と実践が定着した。このことは、資料の集積によって事実を提示するだけの展示では、戦争を人間の体験として伝えきれないことが、博物館、体験者、平和学習をすすめる学校団体などに共通の認識として理解されていたことを示す。

(2) 体験者から直接話を聴くことが難しくなりつつある現在、平和博物館では、証言映像のアーカイブ化や、体験の無い「伝承者」が体験者に代わって体験を伝える取り組みなどを進めている。しかし、見学者が歴史資料に人間の戦争体験を感じ取ることができたのは、実際に歴史をくぐり抜けた体験者に対峙する経験があったためである。従来の歴史展示に証言映像のデジタルデバイスを加えたり、体験者の証言内容を伝承するだけでは、今後見学者に戦争体験に向き合う姿勢を呼び起こすことは難しい。平和博物館では新しい展示アプローチが必要とされている。

2. 研究の目的

(1) この状況を踏まえて、本研究では、様々な領域の研究者と博物館の実務者の協働によって、今後の戦争体験継承展示に求められるものを明らかにし、体験者が不在の中でも、見学者が戦争体験を継承することができる展示のあり方を提起することを目的としている。

(2) その際、現在定式化している展示や戦争体験継承の問題点を明らかにした上で、戦争体験のない者が他者の戦争体験を伝えようとする実践に着目し、学際的なアプローチと斬新な発想によって実際に展示をつくり、この展示を通して見学者がどのように戦争体験継承に向き合ったのか調査し、その学術的意義を検証するものである。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者、研究分担者、研究協力者を中心に期間中に11回のワークショップを開催した。ここではまず、これまでの平和博物館における戦争体験継承の実績と課題に対する共通の理解を深めた。その後、体験の無い世代による継承の取り組みに着目し、実践者を招いて検討を行った。フォトジャーナリスト、伝承者、歴史写真調査、沖縄戦の遺品収拾活動の支援、ビジュアル・スノグラフィー作品の制作など様々な分野での継承の実践は、戦争体験継承の多様性と可能性を示した。

(2) また、戦争体験にアプローチする展示技法の幅を広げるため、代表者と分担者は、国内外の負の遺産に関わる博物館展示調査を行った。

(3) これらをもとに、代表者、分担者、協力者に展示の実務者を交えて展示を構想した。このとき、戦争体験とは何か、その継承とは何か、なぜ、継承が必要なのかを来館者に問いかける展示とすることを最も重視した。体験継承の制度化により「聞き手はサービスの受け手」となり、体験を聞くことが必ずしも「その意味を問い続ける」ことに繋がらない(根本 2018)という問題が、戦争体験の継承における喫緊の課題だからである。

(4) 展示構想をもとに、立命館大学国際平和ミュージアムが収蔵する被爆資料についての来歴調査と、資料の持ち主とされた人物の遺族や同じ状況に居た生存者への聞き取り調査を行った。調査と展示案の往復を繰り返しながら、2018年度立命館大学国際平和ミュージアム秋季特別展「8月6日」を制作した。調査の過程では、想定外の事実も見つかり、それらを手がかりに、来館者に展示資料の来歴を通して、戦争体験とは何かを問いかけた。(兼清 2019)

(5) 実施された展示に対して、調査票を用いた来館者調査と展示内での問いに対する来館者の書き込みの分析、展示評ラウンドテーブルを実施し、この展示を通して見学者がどのように戦争体験継承に向き合ったのか、その学術的意義を検証した。

4. 研究成果

(1) 最終的な成果である展示の詳細、背景となった理論、出品資料などについては『立命館大学国際平和ミュージアム、8月6日：2018年度秋季特別展』、11回のワークショップの概要、展示構想過程の議論の記録、聞き取り調査記録、展示概要、来館者調査と来館者の書き込み分析、展示評については『2016 - 2018年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究研究成果報告書 平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築』を発行した。研究成果の詳細はこの2冊を参照いただきたい。

(2) 本研究の第一の成果は、これまで定式化してきた戦争体験継承の遺産化に対して、戦争

体験を次世代に残す遺産ではなく、伝え手と受け手の相互行為（コミュニケーション）の中で成立するものとし、来館者が受け手としての主体性を持つことができる展示の制作を目指したことにある。

（3）第二の成果は、戦争体験継承の実践から、継承行為の多様性が確認できたことにある。証言や資料に向き合うことは、受け取るのではなく、語りなおすことであった事例、言葉以外の行為での継承の可能性、相互行為の中で他者の戦争体験に迫ろうとするときに起こる変化などを、実践者たちは示した。

（4）第三の成果は、これらの論点を、斬新な発想で展示として展開したことにある。

時系列を遡って見せ、資料の来歴を覆し、継承行為の是非を来館者に問いかける歴史展示は、これまでにないアプローチである。この発想は、戦争体験継承に対する再考を促して来館者に継承のバトンを渡す可能性を開いた。また、いつ、どこで、誰が何をしていたのか、具体性を持って体験の細部を追求する方法は、資料によるリアリティの汲み取り方に新しい可能性を示した。

戦争体験継承の場とされる8月6日の広島平和記念公園で繰り広げられる多様な営みを映し出す多数の映像の中に来館者を投じたり、被爆資料を見る来館者自身の姿をわずかの時差を持って眼前に投影する映像展示は、映像を通して来館者を歴史に従事させる新たな方法を提示した。

（5）第四の成果は、見学における来館者の思考を分析し、展示による戦争体験継承の可能性とともに、課題を明らかにしたことにある。

来館者調査では、平和学習で獲得した正解を示すことに重きを置いたり、強烈な印象を与える局面のみに反応することで、それらの関係性に目を向けたり、継承の意味を考察する方向に向かわない見学傾向もあることが明らかになった。

博物館展示は、見学者の解釈に開かれたものであり、展示の狙いとは異なる解釈も自由である。その中で、戦争体験に対する考察を深める場であるためには、制作側の考えを提示するだけでは不十分であり、展示と見学者の相互行為の性質についても慎重な考察が必要であり、制作側は常にこの課題を突きつけられながら実践を続けることになる。

（6）第五の成果は、本研究では、展示の企画段階や制作過程の議論、見学者の受け止め方などを記録したことである。先行事例を検討する中でも、戦争体験継承にかかわる議論と展示実践は豊富にありながら、それらがどう結びつき、何をもたらしていたのか直接的な資料が残されていないことが課題として浮上した。本研究の実施は、今後、周辺領域の研究と戦争体験継承展示の実践を結びつける上でも有用なものとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計17件)

小川さやか、緩慢な移動を可能にする海賊システムー中国・香港におけるアフリカ系交易人を事例に、環太平洋文明研究、第3巻、査読無、2019、122-133

小川さやか、Impact of Imported Chinese Furniture on the Local Furniture Sector in Arusha City, Tanzania: Focusing on the Strategies of Furniture Makers for Using Indigenous Timbers、African Study Monographs、55号、査読有、2018、27 - 47

小川さやか、クリーンな政治と「融通」のあいだ、青淵、824巻、査読無、2018、20 - 22

小川さやか、「他動力」 香港のタンザニア人の「多動力」、現代思想、第46巻、査読無、2018年、148-158

小川さやか、序に変えて 現代的な消費の人類学の構築に向けて（特集：現代消費文化を捉える人類学的視点の探求）、文化人類学、83巻、査読有、2018、47-57

兼清順子、人類の負の遺産を展示する博物館 ロンドンにある2つのホロコースト展示 -、平和博物館研究、19巻、査読有、2018、22 - 33

加國尚志、メルロ＝ポンティとイメージの問題、形象、3号、査読有、2018、44 - 64

加國尚志、キアスム、非連続の連続 - 西田哲学と後期メルロ＝ポンティ存在論の接するところ、西田哲学会年報、14巻、査読有、2017、72 - 84

加國尚志、抽象芸術と感情 アンリの生と現象学とリオタールの崇高 - 前衛論から、ミシェル・アンリ研究、7巻、査読有、2017、21 - 39

小川さやか、タンザニアにおける路上商人の組合化とインフォーマル性の政治 抗争空間論再考、文化人類学、82号、査読有、2017、182 - 201

小川さやか、オートエスノグラフィに溢れる根拠なき世界の可能性、現代思想、45巻、査読無、2017、123-137

小川さやか、The System of Circulating of the Debt: The Money Transfer System of Mobile Phone in Tanzania、Inaga Sigemi ed. A Pirate View of World History; Reversed Perception of Order of Things From a Global Perspective、1、査読無、2017、47 - 61

田中聡、蓑島・井上両氏への応答、歴史科学、228巻、査読無、2017、55 - 58

加國尚志、生と死のあいだ - 臨床哲学と医学的人間学、現代思想、第 44 巻、査読無、2016、186-207
高誠晩、反共社会を生き抜くための体験記述 - 済州 4・3 事件にかかわる公的文書を読み解く、人権問題研究、第 15 号、査読無、2016、55 - 67
高誠晩、移行期正義とローカル・リアリティ - 済州 4・3 事件以後を見つめなおす、コリアン・スタディーズ、第 4 号、査読有、2016、44 - 53
山根和代、米国デイトン国際平和博物館などを訪問して、雲母、5 月号、査読無、2016、46 - 51

[学会発表](計 43 件)

根本雅也、アメリカにおける「ヒロシマ」、広島平和記念資料館講演会、2018 年
根本雅也、アメリカにおけるヒロシマ・ナガサキの「受容」、日本国際文化学会第 17 回全国大会、2018 年
根本雅也、Balancing Two Cultures: Lives of Atomic Bomb Survivors in the US, XIX ISA World Congress of Sociology、2018 年
根本雅也、Outrage for Peace: Questionnaire Study on Hibkusha's Thoughts and Experiences、World Social Science Forum、2018 年
根本雅也、Living with Uncertainty, Struggling with Possibility: A Study on Radiation Effects from the Perspective of Atomic Bomb Survivors、UGAT 40th Conference、2018 年
根本雅也、継承の力学ー広島における『被爆体験』の遺産化とその影響、長崎被爆・戦後史研究会、2018 年
根本雅也、Hiroshima and Atomic Bomb: Suffering and Collective Memory、Ateneo de Manila University、2018 年
根本雅也、The Effects of Construction of Aggressors and Victims: Storytelling Activities Atomic Bomb Survivors in Hiroshima、AAS-Conference、2018 年
田中聡、戸邊秀明、東アジア史学史における「実証主義」の課題、東アジア史学思想史研究会、2018 年
吉村和真、田中聡、「マンガ」と「平和」を展示する、立命館大学土曜講座、2017 年
田中聡、歴史マンガから差別を考えるー歴史叙述とマンガを結びつける「差異の思考」、佛教学人権講座、2018 年
加國尚志、Not Touching Him, Merleau-Ponty: Around Derrida's Lecture of Merleau-Ponty, Symposium on "Phenomenology and (Post-)Structuralism"、2018 年
加國尚志、錯綜体、潜在性ー市川浩身体論再読、日仏哲学会プレ・イベント企画「見果てぬ哲学」、2018 年
小川さやか、When the Auto-Ethnography of Anthropologist Intersect with the Auto-Ethnography of Investigator: A Case Study of SNS of Tanzanians in Hong Kong, Special Seminar in Department of Anthropology、2018 年
小川さやか、研究するための狡知ーフィールドワークから論文誌筆まで、関西大学主催ワークショップ『フィールドワーカーのための課題解決フレームワーク』、2018 年
小川さやか、被調査者のオートエスノグラフィに参与することーSNS 上に紡がれる香港在住のタンザニア人たちのライフヒストリーを事例に、日本文化人類学会第 52 回研究大会、2018 年
小川さやか、不確実な都市を生きぬくヒント、株式会社ロフトワーク主催『不確実性の為のツールボックス no. 1』2018 年
小川さやか、自動翻訳ツールにできないことー自言語による人類学の可能性、韓国文化人類学会 2018 年春季大会、2018 年
小川さやか、The Logic of "Open Reciprocity": Case Study on the Sharing Economy and "Platform-liked Civil Society" among Tanzanians in Hong Kong, Special Seminar in Department of Anthropology、2018 年
木立雅朗、田中聡、伝統工芸の民族考古学的調査及び竹松家資料のデータベース作成と活用、2017 年度私大戦略報告会、2018 年
21 根本雅也、Remaking Hiroshima and Nagasaki: Commemorations of Atomic Bombing in the US、AAS-in Asia Conference、2017 年
22 兼清順子、Peace museums After Survivors、International Network of Museums for Peace 9th International Conference、2017 年
23 山根和代、The Present Situation of Museums for Peace in Japan and Peace Education Through Grassroots Museums for Peace、APPRA Conference、2017
24 高誠晩、申請主義と窮余の策ー済州 4・3 以後における「申告書」の読み、2017 韓国口述史学会夏季学術大会、2017 年
25 加國尚志、メルローポンティにおける現象学と形而上学、土井道子記念京都哲学基金シンポジウム、2017 年
26 山根和代、The Present Situation of Museums for Peace in Japan and Peace

Education Through Grassroots Museums for Peace, International Network of Museums for Peace 9th International Conference, 2017 年

27 田中聡、エミシ社会論の立場から、大阪歴史科学協議会、5月例会「西バルト海地域の初期社会における国家形成」、2017 年

28 田中聡、日本古代史研究における「民族論」の現状と課題、東アジア史学思想史研究会、2017 年

29 小川さやか、The Logic of "Open Reciprocity" of the Tanzanian Union in Hong Kong and China, International Union of Anthropology and Ethnology, 2017 年

30 小川さやか、ケータイは私のオフィスー香港・中国のタンザニア人たちのビジネスとコミュニティ、日本アフリカ学会第 54 回学術大会、2017 年

31 小川さやか、アフリカの古着流通ータンザニアを事例に、持続可能な消費社会、地域資源発掘 ASAA, 主婦連合、主婦会館主催『古着回収はどうあるべきか連続講座第 3 回』、2017 年

32 小川さやか、瀬戸際の狡知と笑い、京都芸術センター『内臓語にもぐる旅』、2017 年

33 小川さやか、タンザニアにおけるオルタナティブな路上空間のつくりかた、ミサワホーム近畿株式会社主催『都市のインフォーマリティが生み出すオルタナティブ』、2017 年

34 小川さやか、The Logic of "Open Reciprocity" in the Business Practice and Communality of Tanzanian Traders in China and Hong Kong: With the Special Reference to the Used Car Trading Through the Crowdfunding, International Symposium France-Japan Area Study Forum, 2017

35 小川さやか、The System of Circulating "Dept" among Friends: The Business Practices and Community of Tanzanian Dealers in Hong Kong and China, Chinese University of Hong Kong, 2017 年

36 小川さやか、Timber Marketing in Local Growth Pole, Arusha City, Arusha Region, International Workshop on Emerging "Local Initiative" with Resource Management in Tanzania, 2017 年

37 福島在行、メディアという視点から平和博物館を捉えるために、日本マスコミュニケーション学会、2016 年

38 兼清順子、Intersections of Multiple Perspectives on War, Practicing History at the Time of Crisis in Globalization Consensus, 2017 年

39 山根和代、How Stories of Survivors Can Help Lead to Peace?, オハイオ州ウィルミントン大学、2016 年

40 高誠晩、Legacies of the Pacific War Interrelated in Islands of Asia-Pacific Region: From the Comparative Study of Islands in Asia-Pacific Region, 22nd Pacific History Association Conference 'Mo'na: Our Pasts Before Us, 2016 年

41 加國尚志、抽象芸術と感情ーアフリカの生の現象学とリオタールの崇高ー前衛論から、日本ミシェル・アンリ学会、2016 年

42 小川さやか、Copy Mobile Phone, Tanzania and China, Low-end Globalization on Three Continents, 2016 年

43 小川さやか、「負債」から「借り」へータンザニアにおける携帯を通じた送金システム (M-pesa) を事例に、日本アフリカ学会第 53 回学術大会、2016 年

〔図書〕(計 11 件)

兼清順子ほか 19 名、京都大学学術出版会、トラウマを共有する、2019、598

根本雅也ほか 2 名、新曜社、原爆をまなざす人びと - 広島平和記念公園八月六日のビジュアル・エスノグラフィ、2018、304

根本雅也、勉誠出版、ヒロシマ・パラドクス - 戦後日本の反核と人道意識、2018、288

加國尚志、根本雅也、兼清順子ほか 1 名、立命館大学国際平和ミュージアム、8 月 6 日：2018 年度秋季特別展、2018、63

小川さやか他、朝倉書店、世界の地誌シリーズ アフリカ、2017、163

山根和代ほか 3 名、平和教育学研究会、平和教育学事典ホームページ版、2017、ページ数なし

小川さやか他、丸善出版、世界の暦文化事典、2017、432

高誠晩、京都大学学術出版会、<犠牲者>のポリティクス - 済州 4・3/沖縄/台湾 2・28 歴史清算をめぐる苦悩、2017、258

加國尚志、晃洋書房、沈黙の詩法 メルロ＝ポンティと表現の哲学、2017、237

小川さやか他、思文閣出版、海賊史観から見た世界史の再構築、2017、852 (296 - 305)

小川さやか、光文社、「その日暮らし」の人類学 - もう一つの資本主義経済、2016、224

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/peri/study/2016/mono.html>

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/peri/study/2017/mono.html>

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/peri/study/2018/mono.html>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：加國 尚志
ローマ字氏名：(KAKUNI, Takashi)
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：90351311

研究分担者氏名：田中 聡
ローマ字氏名：(TANAKA, Satoshi)
所属研究機関名：立命館大学
部局名：文学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：10368011

研究分担者氏名：川村 健一郎
ローマ字氏名：(KAWAMURA, Kenichirou)
所属研究機関名：立命館大学
部局名：映像学部
職名：教授
研究者番号(8桁)：70454501

研究分担者氏名：小川 さやか
ローマ字氏名：(OGAWA, Sayaka)
所属研究機関名：立命館大学
部局名：先端総合学術研究科
職名：准教授
研究者番号(8桁)：40582656

研究分担者氏名：高 誠晩
ローマ字氏名：(KO, Sonman)
所属研究機関名：立命館大学
部局名：衣笠総合研究機構
職名：研究員
研究者番号(8桁)：40755469

(2)研究協力者

研究協力者氏名：福島 在行
ローマ字氏名：(FUKUSHIMA, Ariyuki)

研究協力者氏名：根本 雅也
ローマ字氏名：(NEMOTO, Masaya)

研究協力者氏名：山根 和代
ローマ字氏名：(YAMANE, Kazuyo)

研究協力者氏名：鈴木 岳海
ローマ字氏名：(SUZUKI, Takami)